花散桜ーSara

風斬黎歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
花散桜―Ｓａｒａ

【Ｎコード】
Ｎ５８０８Ｚ

【作者名】
風斬黎歌

【あらすじ】

真羅刀「沙羅」は、夜の闇の中で、次々と人を斬り、また表の世界でも、謎の連続殺人事件が社会問題化していた。
刑事の息子であり、また不良でもある梶原結城は、その連続殺人事件に興味をもった。
こうして、人間と異形が邂逅したー…

懐古　暗闇の中で

鐘が鳴り響いた。

一人の老人の遺体が、霊柩車に乗せられ、運ばれていく。彼がもっとも愛していた女性は、葬式には参列していない。

彼女は、もっと離れたところで、彼の魂を見送っていた。

彼女の力でなら、彼の魂を繋ぎとめ、異形に仕立て上げることができた。けれど、彼女は、彼を愛していたからこそ、その魂が黄泉へ逝くのを見届けた。

思い出されるのは、楽しかった日々ばかり――…

斬りたくて斬りたくて仕方がなくて、斬っても斬ってもその欲望が満たされなかった暗黒の日々から、沙羅を救い出してくれたのは、あの少年だった。

笑顔をくれたのは、あの少年だった。

魔物でも涙が流せるのだということを教えたのは、あの少年だった。

第一話　雨の日

雨が、降っていた。南国のスコールのように激しい雨が、降っていた。

人々が建物の中に籠もった、人気のない通りを、一人の少女が歩いていた。傘もさしておらず、びしょぬれになってもおかしくないのに、何故か少女は雨に濡れていない。空から落ちてくる一粒一粒の雨が、彼女を意識して避けているかのように、奇妙に方向を変えて、地面に落ちていく。

歩いていくうちに、激しく揺れる植木の影に、人が座り込んでいるのが見えた。どうやら少年のようだった。体に、たくさんの痛みを抱え、体の外側からも雨風を受けて、とても苦しんでいる――ように見えたが、彼自身は痛みを感じていないようだった。

彼女としても、早く自分が滞在しているカプセルホテルに帰りたかったのだが、それを放っておけるほど彼女は冷酷ではない。

「…どうか、なさいましたか」

彼は、驚いたように顔をあげた。まさか、自分が声をかけてもらえるとは思っていなかった、そういった驚き方だ。

「あら、その格好とその傷から判断して、別の不良達の縄張りにでも踏み込みましたか」

心なしか、彼女の声には嘲りが混じっている。

「ちげぇ、よ…痛っ…俺は、暴走族から抜けるって、そう、言ったんだ。そしたら、「ケジメをつけろ」って言われて…」

「良いことだわ。更生したいと思ったのなら」

「…か、匿ってくれ！助けてほしいんだ…」

「何故。暴走族を抜けたのなら、警察に助けを求めたらよろしいのでは」

「お、俺は…人を、殺しちまったんだ」

「…殺した？」

彼女が、何かを思い出したように問い返す。

「殺し、ちまったんだ。俺、俺は…バッドで、背中を思い切り、殴られて…それまで、痛みを感じなかったのに、急に痛くなって、辛くて、それで…ただ。あいつらがどっか行ってほしいって思ったんだけなんだ…そしたら、それだけで…それだけで…

あいつらが勝手に吹っ飛ばされて、勝手に壁に激突して死んだ」

「ああ…気にかけることはありませんわね。例えそれがあなたの意思だったとしても、あなたはその人たちに手を触れていないのでしょう？けれど、一方的に殴られた傷は残っている。あなたがやったという殺人は成立しても、それは「正当防衛」として判断されるはずですから。

――それに、私も、人を殺しています」

彼女の突然の独白に、少年がぽかんとする。

「くれぐれも、一時の感情でその力を使うことがありませんように。今のあなたは人を殺そうと思えば殺せる。――私のように」

なんだこいつ、頭がおかしいんじゃないのか、と少年は、自分に聴かされていることを、脳で「笑劇」として処理しようとする。

「頭がおかしい、と思いましたか？」と、少女はふっと笑って言った。

「当然です。今の私は、人間ではないのですから」

彼女が笑顔のまま吐きだす言葉には、妙に真実味があった。

その顔は、本当に、切なげな笑

顔だった。

少女はそのまま立ち去ろうとしたが、思い出したように少年のところに戻ってきた。

「警察に、連れて行ってあげましょうか」

「！？」

「大丈夫…貴方が罪に問われることはありませんわ。むしろ、被害者として扱われるはず」

少年にとっては、本当に夢のような顛末だった。女性に背負われたのは、初めてだったのだろう。外見は粋がっている癖に、彼女の背中で、彼は子供のように眠ってしまった。

「…馬鹿な、子供。どうして私は…この子を、憐れんだのでしょうか」

その問いに、答えてくれる者はいない。

第二話　水滴は赤く染まる

少女にとっては、一人の少年を助けたことは、ほんの数秒間の出来事でしかなかった。

あれから、数か月が経つ。その、数コンマの記憶を思い出して、彼女はようやく彼の表情を思い出した。

あれは、きちんと更生しただろうか。…あの日のことは、全部忘れてくれているといいな。覚えていられた方がこまるから…と思いながら、彼女は昼下がりの通りを歩く。

そうして彼女は、後ろから着けてくる気配があることに気がついた。人ごみのなかでも、確実に彼女を見失わずに、追いかけてくる。

そして、前の方からも二人。後ろからは三人。前方を視認したところ、二人とも男だった。後ろをちらっと振り向くと、三人もまた男。

「…見つけられましたか。…いえ…　見つけてしまいましたか」

自分が他の誰よりも美人だと知っているからこそ、彼女は彼らの目的を知っている。

そう、この美貌は、彼女の「生きがい」の為にあるのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5808z/

花散桜―Sara

2011年12月20日23時53分発行